

間、日本政治学会の枠内で政治史家の組織化を考えたこともあったが、筆者自身が組織化の才能を欠き、かつ遠隔地に住んでおり、声を掛けた同世代の五百旗頭薫准教授（当時）も消極的で、計画は立ち消えとなった。いまでは、筆者は個人として有終の美を済すことだけを目標にしている。組織化⇨派閥化すると相互に妥協したり、自分の同志を増やそうと無理をする面が出てくるから、余計な人間関係なしに個人プレーに徹したほうが、学問の深化には良い面もある。その代わり、ヨーロッパ政治史研究は我々世代でお仕舞になるだろう。

本論文は日本政治学会での口頭報告のみを念頭に置いたもので、当初は刊行を考えていなかった。だがこの間、太田匡彦教授（東京大学法学部（行政法））から「刊行の予定はないのか」と聞かれるなど、特に近い世代の研究者からこの論文を話題にされることがしばしばあった。共感や興味を示す意見もあったが、無作法だと顔を顰められることもあった。報告から三年後、二〇一三年一月二三日に網谷教授から、報告論文を刊行したとの電子メールを受領した（網谷龍介「比較政治研究における『歴史』の変容」、『同時代史研究』第六号（二〇一三年）、二七―三五頁。）。そこで筆者も、二年間を掛けて自分の古い報告論文を当時の文面のまま刊行することにした。日本政治学史の一史料として後世に残すことにしたのである。

ある。実際、職場での役割分担に著しく非協力的な人物が、研究業績だけの審査で採用され、採用後にその非常識な振舞が問題化するというような事態は、できれば事前に避けたいというのが、どの職場でも人情だろう。

政治関連の科目には、人事を自由競争にできない事情が他にもある。一般に政治関連の研究者は、研究者養成を通じて自分の価値観や手法を広めたいという思惑を懐いており、そのために柔軟な人事制度を必要とするのである。刑法学の前田雅英教授（首都大学東京）もこう指摘している。「かつては、学説の中で有力なものを多数説と呼び、更に確立したものの場合を通説と呼んできた。多数か否かは、結局、支持する学者の数（弟子の数）で決まる面があった。」（前田雅英「裁判員裁判・法科大学院と教科書の役割」、『パブリッシャーズ・レビュー』第三五号（平成二七年）、七頁。）最近でも（文系理系を問わず）一部学者が、「日本学術会議前会長」、「東京大学名誉教授」、「京都大学教授」、「ノーベル賞受賞者」と肩書を誇示して、「立憲主義」や「反安保法制」といった特定の政治的主張を、集団で主張するという光景を目にするが、彼ら年輩世代が多様な政治的価値観を有する後続世代の擡頭に、学界においてどう対処するのかは、今後注視する必要がある。

（三）国や地方の財政悪化で、大学は乾いた雑巾を絞るような状況にあり、教員には資金調達の意味が課されている。「研究実績とは集金実績である」という時代が本来に來たのである。聞くところでは、近年では理系学問に対して文系学問の存在意義を示すために、一般市民を動員した「熟議民主主義」の社会実験など、費用の掛かるイベントを企画して大型資金を政治学界に呼び込むのだという。研究費を集めるために研究課題を決めるとは、本末転倒も甚だしい。資金獲得の成功者が次の競争資金の審査委員となり、あるいは採用人事担当者となるなら、学界が同質化する可能性もある。

このように報告から六年を経た今日では、筆者も事態をより深刻に捉えている。もはやヨーロッパ政治史研究は、その必要性があらうとなかろうと、水準が上がろうと上がるまいと、政治学の隅に押しやられ、法学部・政治経済学部ではなく、外国語学部の地域研究の一部などとして、辛うじて大学に残る程度になるのかもしれない。筆者はこの

固定観念に抗し得ず、かつてのドイツ研究への情熱を失い、寧ろ日独関係史研究や日独比較研究に重点を移している。日本政府が「クール・ジャパン戦略」を提唱し、エキゾチックな日本文化を前面に押し出しているのも、国際的市場の需要に自分を合わせていく現代日本人の姿を現している。

「グローバル化」時代の学問は、「狭く深く」ではなく「浅く広く」である。かつては「篠原シュレ」でも、研究者はある特定の国や地域（語圏）を研究対象に選び、語学力を磨き、留学して人脈を築き、学問から日常生活まで様々に体験することが多かった。しかし「篠原シュレ」第二世代には、地域研究色が薄い者も現れ始めていた。最近はある特定の専門地域を持たない、いわば「彷徨える比較政治学者」もいるようで、英語などの情報源を駆使して、特定の政策領域に関して多数の国々を比較するという軽快な「比較政治」研究で学位取得を狙うらしい。かつてはヴェーバー訓話学の視野狭窄に苦言を呈した筆者だが、ドイツ語史料を駆使しない「ドイツ政治研究」が登場し、「神は細部に宿る」という言葉が死語になっていくなら、それは誠に残念に思う。

「グローバル化」時代には、ヨーロッパの学界も知的発信力を落としている。世界の大学ランキングなどで、独仏などの大学は揃って低い評価で、日本や中華人民共和国の大学よりも苦戦している。要するに英語圏の文化的影響力が誇張され、分厚い蓄積のある非英語系西洋諸国が、従順に英語で学ぶ北欧や新興国にすら後塵を拝するのである。筆者がミュンヘンで対話した戸田真介首席領事（在ミュンヘン日本国総領事館）は、ドイツ人も文化的発信に自信を失っているようだと言っていた（二〇一三年九月一七日）。

(二) 法学部の公募求人嫌いはいまま変わりない。少なくとも形式上は公募求人が一般的になりつつある日本の学界で、法学部はその例外であり続けている。

一般に公募求人が採用側にとって困るのは、自由な業績競争の結果、自分たちのイメージに合わない人物が最終候補になるからである。信頼関係にある人物、意見が近い人物ではなく、初対面の人物、意見が遠い人物を採用すると、学統の連続性を損ない、職場での人間関係が難しくなるのではという虞が、恩顧・縁故採用が好まれる背景には

近頃は「篠原シュレー」の話を余り聞かない。特定大学・特定学部が政治学を牽引するという時代が終わり、有為な若手がどこから現れるか分からないという状態になったのは、日本学界がそれだけ成熟したことを意味すると思う。また最近、水島治郎教授（千葉大学）の企画した『保守の比較政治学』（岩波書店、二〇一六年）や分科会「陛下」の政治学（日本政治学会二〇一六年研究大会）が示すように、「篠原シュレー」出身者でも従来のお決まりの枠組から縁の遠いテーマで、新しい顔ぶれで共同研究が行うようになった。ただ喜んでばかりもいられない。「篠原シュレー」が目立たない最大の原因は、ヨーロッパ研究それ自体の衰退にある。最近では東アジア、中東、アフリカの経済発展や地域紛争が、学界の主要な関心事になっている。日本の政治学者は吉野作造の時代から、マスメディアの需要に応えることを重視しており、最近では大学が産学連携を重視するようになっていたので、こうした新興国ブームはマスメディアや財界の需要に応じている面があると思う。世界の政治制度は依然として西洋起源のものであるとしており、西洋諸国がG7（G8）で世界政治の決定に大きな役割を果たしていると我々西洋研究者が主張しても、もはや耳を傾ける者は少ない。

筆者がかつて提示した「建設的提言」に関しては、今日では以下のようなことを感じている。

(一)「グローバル化」というのは、経済でも学問でも、国際的分業を促進する効果を持つ。国際的競争力のない生産者は廃業し、輸入者に回れという圧力に晒されるのである。こうなると元々国際的競争に対応していない日本のヨーロッパ政治史研究は、ますます国内向け情報提供に徹するよう求められることになる。

二〇一二年にミュンヘンに滞在して感じたのは、ドイツ学界の日本人研究者を見る目も変わったということである。一九九八年にベルリンに留学した頃には、遠くからドイツ史を学びに来る日本人留学生を可愛がるという余裕が、ドイツの教授陣にはあったと思う。だがいまやドイツ人研究者は日本人に接するとき、長年ドイツ語に親しみ、ドイツに生涯を捧げてきたドイツ研究者よりも、ドイツ語は初級レベルだが、英語でなら日本関連情報を提供できるという日本研究者を重宝するのである。日本人ドイツ研究者も、そうした「日本人Ⅱ日本研究者」というドイツ側の

本大輔准教授（明治学院大学・オクスフォード大学博士号取得）で、筆者に対して「日本人の西洋政治史研究者が現地で通用する業績を残すためにはどうしたらよいのか？ 現地の研究者と同じことを同じレベルでやるのがよいのか、それとも日本人ならではの問題提起や研究方法というものがあえるのか？」「留学や在外研究の条件がよくなった現在の視点から先人の業績を評価するのは不公平ではないか？」と問うた。筆者は、『マックス・ヴェーバーとポーランド問題』のように、大きな研究対象を選び小さな局面から攻める手法なら、日本人でも現地人に対抗する成果を出せるはずで、また対日関係研究なども日本独自の視点が出せるだろう、吉野作造のドイツ学界評価などは、同時代の日本人と比較しても不勉強であり、思い上がりも甚だしく、先人の業績として目標にできるようなものではないと回答した。

この分科会のあとも「篠原シューレ」はしばらく存続した。馬場教授退職（二〇一二年三月）の際には会合があったらしいが、筆者には声が掛からなかった。篠原名誉教授米寿（二〇一三年八月）の際には、門下生の祝辞を集めた冊子『篠原一先生 米寿を祝して』が捧呈され、筆者も小文「ミュンヘンでの所感」を掲載した。この際、筆者は小川教授に促して、そのオーラル・ヒストリーを後世に残すことを考えたが、「体調」が思わしくないので、実現せずに終わった。

篠原一名誉教授は二〇一五年一〇月三十一日に九十歳で逝去した。同年二月七日一八時半からアルカデア市ヶ谷（私学会館）で、故人を偲ぶ会が行われ、筆者も参加した。この行事は「かわさき市民アカデミー」の企画で、市民運動家や各界の教え子、菅直人元首相など左派政党・マスコミ関係者が幅広く集まった。そうしたなかで、岡義武門下の弟子である三谷太一郎名誉教授が、若き日の故人が「自分は丸山主義者ではなく、篠原主義者だ」と述べていたという逸話を紹介した。篠原は東京大学法学部内ではマルクス主義への傾倒が比較的強く、法学部内の丸山崇拜に對してやや距離を置く面があったのだろうと思った。この会合では、高橋進教授の実弟で、日本銀行から大阪経済大学に移られた高橋巨教授と偶然隣り合わせ、御実兄の話聞くことができた。

士課程進学後の論文発表、学位論文提出は本人の判断を重視し、論文公募の機会も増やす。国内外の博士号取得を博士論文指導・審査、公募論文査読を担当する際の絶対条件とする。学術書刊行も公募制にし人脈を排除する。不可思議な審査には情報公開を請求する。

結語 「開国」へ向けて。 外国人の招聘より日本人の出撃を重視すべき。国際学界では称讃されるより反論（嫉妬？）されることが重要。多様性のなかでの同業者の連帯・手法、価値観、学閥を越えるべき。比較政治学会が歴史研究、実証的研究を排除する場であるなら、並立する「政治史学会」が必要（あるいは数年に一回開催の「政治史家大会」か）。これからの研究志望者…止み難い欲求と教職免許の取得が研究者を目指す者の前提。

討論者の馬場教授は、筆者の報告内容に「その通り」と基本的に賛意を示した。馬場教授は、歴史研究とは「時間比較政治研究」だというのは、自分も常日頃唱道していることだとした。また馬場教授は、教師が研究者として弟子に「積極垂範」すべきとの意見にも同意し、自分もそれを十分にできていないと述べた。更に馬場教授は、アメリカ政治学を好む「篠原シュレ」が、実はアメリカ政治学のごく一部にしか興味を示していないという筆者の指摘にも同意した。これに対して馬場教授は、文学部との関係の濃淡は政治学者によって様々だとし、また一次史料に基づかない政治研究、現地研究者の「胸を借りる」ことをしない海外留学を批判する筆者の議論にも、同意はできないと述べた。加えて馬場教授は、「自分たちは歴史が好きだが、やはりそれを政治学的に見たいと思った」と、（篠原一の）「歴史政治学」への忠誠を改めて表明した。

討論者の唐渡教授は、現在の大学では共同で科学研究費補助金を申請することがあると指摘し、競争資金の獲得を採用人事でも重視するとの考えを打ち出した。

網谷教授は、自分の学問的軌跡を正当化するような学説史理解をしたことは認めつつ、筆者が政治史研究の復興をしたいなら、政治史を志向する仲間での「セクト」形成が必要だとの見解を示した。

聴衆は、筆者の報告にしばしば笑い声を上げていたが、討論になると静まり返った。唯一人質問票を出したのが池

1. 最優先の課題は、日本のヨーロッパ政治史研究が世界に通用することである。国内での生き残りに汲汲とすると、活力を失って、国外はもちろん国内でも生き残れない。歴史研究か現代研究か、実証的研究か理論的研究か、比較政治論か地域政治論かは個々の研究者の自由選択ですればよい。ただ世界に通用するためには、いずれにせよ高度な専門化が不可欠であり、必然的に対象を限定し、手法を明確化し、独自性を強調せざるを得ない。

2. 世界に通用するためには、豊かな個性と不屈の意志とが必要である。研究志望者の行動を制約する「教壇預言」には注意が必要である。研究指導者は研究志望者の「主人」から「トレーナー」に格下げされるべきであり、学位審査や就職斡旋からも一切外れることが望ましい。研究指導者の研究志望者「選別」は不当である。「シユレ」形成には慎重を期するべきで、特に先輩の師範への過剰な恭順さは後輩を制約する。「学界動向」は個々人の業績の総和に過ぎず、後者が前者に合わせるのは本末転倒、付和雷同。

3. 政治学の「理論」とは、「学ぶ」ものではなく「創る」ものである。「理論」とは、問題意識の醸成と具体的事実との対決とから自然に生まれる一般論で、常に仮説であるから、あらゆる事例に適用できるとは限らない。日本人が自ら「リンス」、「ロツカン」、「レイプハルト」、「サルトーリ」と対等の理論家となるべきである。理論の輸入により啓発されることもあるが、他人の色眼鏡で自発的に視野狭窄をすることにも繋がる。外来理論の知識を権力資源とするのはナンセンス。自分の言葉で語るものしか世界では通用しない。

4. 「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目になる」(ヴァイツェッカー)。歴史研究は「時間的比較政治研究」であり、過去との比較によって、現代の政治状況が当然ではないことを改めて認識することができる。現代は歴史の積み重ねの結果であり、過去の経緯を知らずに現代が語りうる時代は永遠に來ない。いかなる制度も沿革抜きには理解できない。交通や情報通信の発達で、ヨーロッパに関する実証的研究において非現地人の不利さは日々減じている。

5. 「書いて初めて物が言える」(高橋進)。非常勤・常勤の採用に「教歴」は問わない。終身雇用資格を最初に付与する求人公募で行い、国内外の博士号取得を絶対条件とする。単著書刊行を招聘や配置換の絶対条件とする。博

問題提起をした。

続いて村上信一郎教授（神戸市外国語大学）の基調講演「西洋政治史のための弁明——そのアポリアと存在理由」が行われた。村上教授は戦後民主主義の希薄化を憂い、大嶽秀夫教授（京都大学）らの米「実証主義」を政治学の「保守化」、「市民」の忘却だと警戒した。

次は網谷龍介教授（明治学院大学）の報告「ヨーロッパ比較政治研究における歴史の位置価——変教指向と手法指向の先に」である。網谷教授は、政治学界における政治史から比較現代政治への移行、西洋史学界における政治史から社会史への移行を強調した。

最後に筆者の報告「東京大学法学部のドイツ政治史研究——批判的回顧と建設的提言」があった。筆者は「序言」「天災」ではなく「人災」…異なる三つの報告の問題関心を整理し、本報告の立場を明確にする」とし、村上報告、網谷報告に論評した。村上報告に関しては、筆者は「西洋政治史という学問分野それ自体」を論じずその「生息地」(habitat)としての戦後政治学、歴史学全体を論じているため、「西洋政治史」が「絶滅危惧種」となっている固有の理由が見えてこない、「方法的「困難」ばかりが強調され、一体どう「西洋政治史」の「弁明」をしたいのかが不明」と感想を述べた。網谷報告に関しては、「共通課題である「ヨーロッパ政治史」を、臨機応変に「ヨーロッパ比較政治」に読み替え、政治学・学で「歴史」離れの「現実」を演出しようとしている」、「各研究者は自力で打開の道を図るべき」と言いつつ、政治学における「歴史」の意味は失われつつある」と一般の潮流を説き、「歴史学の非政治史化」を誇張して、「政治史」退場を強要している」と感想を述べた。筆者は二〇一〇年前期に刊行されたヨーロッパ政治関係の学術単著書を列挙し、ドイツ『現代史四季報』文献一覧なども挙げ、学術刊行物を見れば政治史研究が依然として世界及び日本の歴史学で大きな役割を占めているはずと主張した。

続いて筆者は、報告論文の内容を振り返ったあと、「研究界への「建設的提言」…ヨーロッパ政治史研究の活性化に必要な条件を考える」と題して、パワーポイントで以下の内容を披露した。

橋教授が世を去って、筆者も直接対決の機会を失った。

筆者が報告論文を学会事務局に送ったのは二〇一〇年九月二二日で、分科会参加者に送ったのはその三日後だったが、その直後から動きがあった。野田教授が筆者の立場を心配し、学界内でも噂になっているので、いまからでも論文を撤回してはどうかと提案されたのである。だが筆者はこれを断り、野田教授も諒解された。

篠原一名誉教授は、小川有美教授（立教大学）を通じて筆者の報告論文を求めた。篠原名誉教授は二〇一〇年一月三日、筆者に電子メールで次のような感想を寄せた。「一読したところですが、大変有益な指摘が多く、活発な討議がなされるものと期待しています。もつと歴史をやるようにといつてはいるのですが、なにせ若い世代の人と接触することが少なく、老人は過ぎ去るのみです。」「篠原シュレ」の若手が現代政治ばかりを扱うことについて、篠原名誉教授が皆の前で苦言を呈する光景は、筆者も二〇〇四年四月二三日の夕食会（於東京目白）で目撃したことがある。そのとき馬場教授は、最近の若手も決して歴史への感覚を失っているわけではないと、弟子を擁護したのを記憶している（この点は前述『アエラ・ムック』での議論と関連している）。

当日の名古屋はいにくの雨天だったが、この分科会は大変な盛況ぶりであった。開始前に馬場教授が、この人数を集めたのは君だと筆者に述べた。懇親会の直前という時間帯であったことも、集客には影響しただろう。筆者が声を掛けた愛知県立大学系、東大西洋史系の研究者は余り来なかったが、中田晋自准教授（フランス政治）は義理堅く（開始時間丁度に）姿を現した。また所用があると欠席を予告されていた北住炯一名誉教授（名古屋大学）は、実際には開始時間には着席していた。他にも、渡辺浩名誉教授（東京大学法学部（日本政治思想史）・元日本政治学会理事長）が比較的前の席に陣取り、後方に塩川伸明教授（東京大学法学部（ソヴィエト政治史））が渋い表情で着席していた。平島健司教授（東京大学社会科学研究所）など、「篠原シュレ」の構成員も多く顔を揃えた。

分科会は野田教授の挨拶で始まった。野田教授はここで、日本が近代化の過程でヨーロッパの制度を導入して以来、日本の政治学はヨーロッパ政治史の研究を重視してきたが、最近それが変容してきたのをどう見ればよいのかと

《解説（二〇一六年一月）》

一四

本論文は、二〇一〇年一〇月九日（土曜日）に中京大学名古屋キャンパスで行われた日本政治学会研究大会分科会 A8「政治学研究とヨーロッパ政治史研究」での筆者の報告論文である（報告後の文面修正はせず、誤植訂正表を付した）。

この分科会の開設は、司会役の野田昌吾教授（大阪市立大学）の発案による。山口定教授に師事し、ドイツ現代政治を研究する野田教授は、かつて政治学の王道だったヨーロッパ政治史研究が衰退していることを危惧し、その原因について議論する分科会を企画した。野田教授は当初、馬場康雄教授（東京大学）及び唐渡晃弘教授（京都大学）に報告を依頼したが、両名は討論者なら引き受けると返答したので、報告を改めて網谷龍一教授（明治学院大学）及び筆者とに依頼することにしたという。野田教授が当時面識のなかった筆者に声をかけた理由は、拙著『マックス・ヴェーバーとポーランド問題』を読んだためだと聞いた。野田教授は予備知識がなかったようだが、網谷教授は「篠原シュレ」の論客であり、筆者はその批判者であるから、この人選は野田教授の予想に反して、大変刺激的なものとなった。

予てから「篠原シュレ」の問題に意見していた筆者は、偶然与えられたこの機会を、同門の教官や先輩後輩に、特に恩師の高橋進教授に、公開の場で問題提起をする場にしようと考えた。このため筆者は二〇〇九年末から情報収集を始め、同門の先輩なども議論の機会を求めた。なかには筆者との討論に応じる先輩もいたが、対話すること自体を懸命に避けようとする先輩もいた。

ところが二〇一〇年三月二日、高橋進教授が自宅で死亡した状態で発見されたとの報道が流れた。筆者が高橋教授と対面したのは、法学部研究室を引き払った博士号授与式の日（二〇〇六年三月二三日）が最後で、拙著『マックス・ヴェーバー』（二〇〇七年十二月）の献本にもいつも通り反応がなく、それ以降は筆者も何も送らなかった。高

- (19) 東京大学法学部『講義内容／授業時間表／演習一覧』昭和六三―平成一二年度、平成一四―二〇年度。ただ平成一九年度からは「国民化」「民主化」などの鍵概念が見られる。
- (20) 『東京大学法学部研究・教育年報19』(二〇〇五／二〇〇六年)、二一〇頁。『東京大学法学部研究・教育年報20』(二〇〇七／二〇〇八年)、二二四頁。
- (21) 平島健司『ワイマール共和国の崩壊』(東京大学出版会、平成三年)。
- (22) 平島健司『ドイツ現代政治』(東京大学出版会、平成六年)。
- (23) 平島健司「戦後におけるヨーロッパ政治研究の展開——民主制と民主化の視角」、『社会科学研究』第四八巻第四号(平成九年)、七四頁。
- (24) 高橋進「細谷雄一著『大英帝国の外交官』」、『日本経済新聞』平成一七年七月一七日、一九頁。木村靖二の証言(平成二二年三月二七日)。
- (25) 筆者は高橋進を指導教官としたが、その研究方針は篠原一とは無関係で、大学院進学から就職までの歩みも独特なので、本文では「篠原シュレ」第二世代から除外してある。
- (26) 網谷龍介「比較政治学における『理論』問の対話と接合——小野耕二『比較政治』(東京大学出版会、2001年)を手がかりに」、『レヴァイアサン』第三二号(平成一五年)、一七五―一八七頁。同「職業外交官への愛情と外交制度分析の欠如と——細谷雄一『外交』(有斐閣、2007年)を読む」、『国際学研究』第三三号(平成二〇年)、八九―九七頁。
- (27) 月村太郎『オーストリアⅡハンガリーと少数民族問題——クロアチア人・セルビア人連合成立史』(東京大学出版会、平成六年)、二二五頁。
- (28) 飯田芳弘『指導者なきドイツ帝国——ヴァイルヘルム期ライヒ政治の変容と隘路』(東京大学出版会、平成一二年)、三二三―三二四頁。

《誤植訂正表》 二(335)頁 誤…「有益無害」↓正…「有害無益」

- (2) 『東京大学法学部研究・教育年報3』(一九七三/一九七四年)、八八―八九頁。
- (3) 『革新の「灯」を守る 川崎市長に高橋清氏』、『朝日新聞』(神奈川) 平成元年一月二〇日(朝刊)。
- (4) 『東京大学法学部研究・教育年報9』(一九八五/一九八六年)、九頁。
- (5) 高橋進『ドイツ賠償問題の史的展開——国際紛争及び連繫政治の視角から』(岩波書店、昭和五八年)。
- (6) 高橋進『大連合体制とデモクラシー』、篠原一編『連合政治2——デモクラシーの安定を求めて』(岩波書店、昭和五九年)、六七―一五五頁。
- (7) 高橋進『ドイツ社会民主党と外交政策の「転換」』(一九五五―一九六一年)、『國家學會雜誌』第九九卷第一・二号(昭和六一年)、一―九四頁。
- (8) 西川正雄編『ドイツ史研究入門』(東京大学出版会、昭和五九年)。
- (9) 『東京大学法学部研究・教育年報4』(一九七五/一九七六年)、九四頁。
- (10) 高橋進『国際政治史の理論』(岩波書店、平成二一年)。高橋進「神川先生と外交史学」、神川彦松『近代国際政治史』第二刷(原書房、平成六年)、二九八―三〇〇頁。
- (11) 『東京大学法学部研究・教育年報9』(一九八五/一九八六年)、一一、一二七頁。
- (12) 『東京大学法学部研究・教育年報9』(一九八五/一九八六年)、一二七頁。網谷龍介「転換」後のドイツ社会民主党(一九六一―六六年)、『國家學會雜誌』第一〇七卷第三・四号(平成六年)、三三四頁。
- (13) 高橋進『解体する現代権力政治』(朝日新聞社、平成六年)。
- (14) 高橋進『歴史としてのドイツ統一——指導者たちはどう動いたか』(岩波書店、平成二一年)。
- (15) 木村靖二ほか編『世界史体系ドイツ史3』(山川出版社、平成九年)、四二五頁。
- (16) 『東京大学法学部研究・教育年報9』(一九八五/一九八六年)、一二頁。
- (17) 馬場康雄/平島健司「はしがき」、同編『ヨーロッパ政治ハンドブック』第一版(東京大学出版会、平成二二年)、iii頁。この文面は第二版(平成二二年)にも再録されている。
- (18) 馬場康雄「西洋政治史——過去の再構成に取り組む」、『新版政治学がわかる。』(朝日新聞社、平成一五年)、九六―九七頁。なおここではアメリカ政治史も度外視されている。

帯びている党派性も看過できない。(三)世界の研究水準に挑戦する成果の提示。史料の基盤の貧弱なヨーロッパ政治史研究の問題性は、岡や篠原によって認識され、高橋や平島健司は史料面での充実を試みたが、「篠原シューレ」第二世代では史料に対する貪欲さが減退している。国内需要の充足を目標とする分にはこれでもよいが、国際的に自己主張するのは難しい。(四)現代研究一辺倒の再検討。東大法学部のヨーロッパ政治史研究では日本政治への示唆を得るといふ研究動機が強く、常に現代政治中心で歴史研究、思想研究が貧弱であった。歴史研究は戦後、篠原、高橋、平島らによって漸く育まれたが、彼ら自身が現代政治研究へ移行するに伴い成熟しないうちに衰退した。そうしたなか指導を受けた「篠原シューレ」第二世代は、現代政治一辺倒を当然視して育っている。「政治学的」手法への固執も歴史研究の忌避と連関している。(五)クライエンテリズムの再検討。東大法学部ヨーロッパ政治史研究の歴史は「麗しき師弟愛」の歴史である。斯界の「権威」が「非凡」な弟子に惚れ込み、将来を囑望された弟子が「海岳の御恩」に感激してその学統を継承するという方式が、開学以来世代交代の常道となってきた。研究能力が未知数なままでの採用もあり得た初期とは違い、のちには「実績」が求められるようになっていくが、「実績」の算定や評価も主観的で、予め手法、対象、価値観、家系、人格などで選別されるなら、指導教官の初期段階での心証が学生の将来を決定するという「予定説」的構造は何も変わらないことになる。ここでは「フィッシャー論争」のように新世代が旧世代と正面対決し乗り越えていくという構図は想定されておらず、弟子は恩師の観念世界の延長線上での思考を余儀なくされる。「篠原シューレ」の学説整理が「政治学的」研究しか眼中にない「天動説」になるのも自然の理である。どのような大学、手法、価値観にせよ、個々の研究者が「一人一流派」の気概を失うなら、あるいは自分たちの流儀で学界を塗り潰そうとするなら、その研究分野は活力を失って自壊するだろう。

注

(一) 篠原一「私の生き方」、九頁。

体的な政治活動は決して多くないのに、学問的には増産に繋がっていない。第二世代では寧ろ左派的確信の強いものが、政治的情熱に牽引されて比較的生産性が高いようである。

結論 エビゴーンとウムと縮小再生産からの脱却

東京大学法学部の例に鑑みれば、今後のヨーロッパ政治史の研究者養成に際しては、次のような課題があるように思われる。(一) 国際競争を視野に入れた研究計画の戦略的構築。篠原一が警告した「自己閉塞的な日本の学界」はいまも健在である。東大系政治学者は教員身分で在外研究をし、現地学生としての下積み修行を厭う場合が多い。吉野作造は劣等感に駆られてドイツ学界に背を向け、国内限定の反ドイツ的政治評論に終始し、岡義武も憧れのイギリスで学界と対決せず、史料上の困難から日本政治史へと転進した。篠原は西ドイツ学界と対決しなかったが、ドイツ語論文を執筆する覇気を見せ、国際競争力の強化を意識して比較政治に転向したが、「篠原シュール」では国際競争への意欲が篠原より低くなった。またマルクス主義、「アメリカ政治学」、「比較政治」の「理論」という自己限定が視野狭窄を生み、地域研究として深化と多様化、現地語能力の練磨、関係諸学との対話、現地学界との交流を遅らせている。(二) 「教壇預言」の彼岸で学術研究に専念できる環境の整備。東大系研究者は日本社会の「嚮導(キヤナライズ)」者として政治活動するのが伝統で、東大法学部が「象牙の塔」であった時代は開学以来一度もない。吉野は学生時代から政治評論に没頭し、ヨーロッパ政治史研究が成熟しなかった。岡は教壇からマルクス主義に唱導し、神川彦松や矢部貞治はナチズムに親和的な、南原繁は批判的なドイツ紹介を展開した。篠原は社会主義革命を切望する第一作を刊行後、安保紛争を契機に日本政治へと活動の重心を移した。高橋は就職と同時に左派言論に没入し、ドイツ政治史研究は失速した。このように指導教官が政治的「嚮導」者である場合、研究職を志す若手は立場上その価値観に従わざるを得ないが、そうした「教壇預言」が教育上問題視されることはなかった。「政治学」の「理論」が

ある——への挑戦はなかなか進んでいない。

「篠原シュレ」第二世代は、第一世代から恭順の大学文化を継承していった。以下の謝辞は興味深い例である。「私が大学に入学した一九八六年の晩夏、『ヨーロッパの政治「歴史政治学試論」』という書物が発版された。冬学期が始まる前の秋の夜を私はその書物を読んで過ごし、多くの新鮮な知的刺激を受け取っていた。そしてその冒頭で著書の篠原一先生が言明された言葉に強く動かされていた。「社会科学的概念を駆使することによって、歴史を十倍面白く見ること」、「面白いという表現がいささか不謹慎であれば、それらの概念によって、歴史の解釈を十倍豊かにする」こと——。『…』馬場康雄先生に。私は今日、ヨーロッパ政治史の「面白さ」などと平然と口にしますが、それがどれほど先生に負っているか。その大きさにほとんど慄然とします。「以下平島健司、高橋への謝辞が続く」二〇〇六年一〇月八日には、高橋の「教授就任二〇周年」を祝う門下生の会も企画されている。ある院生が「丸山」のヴェーバー解釈を擁護したときに、「驥」と称して「丸山先生」と言い直させるといふ「論文指導」もあった。

「篠原シュレ」第二世代には、第一世代と以下のような違いもある。第一に、初期の篠原、高橋らが史料の扱いに配慮していたのに対し、第二世代では（個人差はあるものの）先行研究から事実、理論を援用することが多くなり、幅広い構造的議論が可能になったが、物事を原点まで辿って探求する気風は第一世代より減じた。第二世代の「学界展望」への情熱はときに著しく、政治の実態より「理論」解釈に熱中し、高橋の助手論文とは逆に事実の彼岸での「空中戦」になっているものもある。第二に、第一世代は近現代史研究から始め、その知見を生かして現代研究を論じたが、第一世代が現代政治へ移行後に入門した第二世代は初めから現代のみを扱うものが多く、歴史的相対化の視点が失われた。第三に、「篠原シュレ」第一世代まで政治活動への没入が研究を妨げる現象が見られたが、第二世代では事情が違う。彼らは左派政党や労働組合のシンクタンク「生活経済政策研究所」（旧称「平和経済計画会議」）に出入りして左派的ミリュールに順応しており、共同研究のテーマである「ガヴァナンス」論、福祉国家擁護論、ヨーロッパ統合擁護論Ⅱ国民国家批判、「ポスト代表制」論などもこのミリュールの政治観と関係しているが、主

「ラ米」といった特異な略語を用い、逆に周辺院生を「政治学的」研究の側へと勧誘していった。総勢数十人に上る「篠原シューレ」は、目下日本のヨーロッパ政治史研究を左右する最大派閥である。彼らは互いの好意的引用を繰り返し、人事でも水面下で交渉し、他大学の「比較政治」礼讃者には是々非々で対応するが、非「理論」派は無視するか糾弾するという排他的同質性を有している。⁽²⁶⁾

「篠原シューレ」第二世代は篠原一の「生涯現役」ぶりに圧倒されつつ、日々第一世代から厳しい指導を受けた。ある弟子はこう回顧する。「感激、緊張、重圧など様々な感情を懐きつつ、三先生の面前において一人で報告を行った（これを、当時研究室に在籍していた若手は「御進講」と称していた）」（「三先生」＝篠原、高橋、馬場⁽²⁷⁾）。精神的重圧に加え、比較政治のため専門地域以外にも各国情勢を把握していて当然という雰囲気も第二世代を苦しめた。なお九〇年代には馬場、高橋はすでに学問的生産の最前線を離れており、身を以て範を示さない第一世代の一方的批判には第二世代から強い不満の声が上がったが、その思いは第一世代には届かなかった。

「篠原シューレ」第一世代の重圧下で、第二世代の「陣痛」は並大抵ではなかった。「早熟の天才」を好む東大法学部では、第一作の助手論文や修士論文で恩師の期待に応えることが重要だったが、第二世代が第一作刊行後、本来就職の前提たるべき博士論文などの第二作で遅滞する場合が多い。それでも公募のない法学部で就職できたものは、単著書執筆・刊行を棚上げて共同研究や海外文献の翻訳に邁進したり、単著書刊行後に論文執筆から遠ざかったりする例が見られる。第二世代は、現代ヨーロッパ政治の教科書を共同で出版するという企画を、過去十年間で三回（計四冊）も行っているが、単著書を出すべき若手がその前に一般書を、しかも類似の教科書を再三刊行するというのは、本末転倒ではなからうか。そもそも自分のライフワークに十分時間を割かず共同執筆に熱中すると、集団行動に慣れて「官僚制化」＝組織人間化し、研究者としての個性の全面開花は困難になるように思われる。第二世代は篠原のデッサンを各国毎に精緻化する作業を分担しているが、篠原とは別系統の様々なテーマ——例えば思想、軍事、宗教、環境、教育、家族、歴史認識、文明の衝突、オリエンタリズムなど、それらも立派なアメリカ政治学の話題で

統合論で研究を進展させているが、歴史研究、思想分析とは系統を異にし、概説書『ドイツ現代政治』では思想的観点⁽²²⁾が全て除外されている。また平島はヨーロッパ政治史研究の学説史を、馬場と同じく完全に「篠原シュレー」中心に整理し、「歴史学の方法を用いる研究」を初めから除外している。⁽²³⁾

かくして「篠原シュレー」第一世代は歴史研究の店仕舞に進めていったが、高橋進はふと別な表情を見せることもあった。他の「理論」信奉者との対抗関係においては、高橋の胸にも往年のドイツ史家魂が甦ったようである。ある門下生がドイツの歴史学博士号への意欲を表明したとき、高橋がこれを歓迎し、激励したこともあった。高橋は他大学の非「理論的」外交史研究も好意的に書評し、最晩年にも戦後ドイツ外交史概説に意欲を見せていたという。⁽²⁴⁾ 高橋の非業の死と共に、東大法学部には本気でドイツ政治史研究と向き合ったものが一人もいなくなったのである。

(5) 「ガラバゴス化」と「官僚制化」——「篠原シュレー」第二世代⁽²⁵⁾

「篠原シュレー」第一世代は、門下生に「シュレー」の気風を叩き込んだ。第一世代は第二世代に、著作、論文刊行に際して篠原に必ず一部を献呈するよう指導した。また第一世代は新しい門下生を採ると、「篠原シュレー」が一堂に会して篠原に近況報告をする晩餐会を企画した。ときには「篠原シュレー」ではない法学部教官との交流が、衆人の面前で糾弾されることもあった。このため「篠原シュレー」第二世代は東大法学部内でも、生産力旺盛な隣接の非「理論的」政治史研究、つまり三谷太一郎、北岡伸一の日本政治外交史、齋藤眞、五十嵐武士のアメリカ政治外交史、溪内謙、塩川伸明のソヴィエト政治史から人脈的、学問的に距離を置くようになっていく。篠原の非「理論的」先達である岡、吉野らのことも忘却され、東大文学部の西洋史学、東大教養学部の地域研究、他大学の非「理論的」諸研究との交流は消滅した。東大法学部内の法学系諸科目、政治思想史、行政学との関係も疎遠である。第二世代は「歴史政治学研究会」（通称「野上研」）というミクロコスモスを形成して学部内でも「ガラバゴス化」し、「キリ民」、

らず、高橋や平島健司よりも真剣に「篠原シュウレ」の育成に自分の使命を感じていた。「篠原シュウレ」第二世代が執筆した最初の共同教科書『ヨーロッパ政治ハンドブック』の序文で、編者の馬場は平島とともにこう述べている。「本書の編者・執筆者は「ヨーロッパ政治史」の魅力に惹かれて研究者の道を志した者たちであり、この学問分野の確立者である篠原一先生の学恩を直接間接に大きくこうむっている。篠原先生の名著『ヨーロッパの政治』は第二次世界大戦までで筆が擱かれているが、本書が戦後を含めたヨーロッパ政治研究を刺激することになれば、われわれにとっても幸いである。」¹⁷⁾二〇〇三年に『アエラ・ムック』政治学特集で「西洋政治史」の分野紹介をした際、馬場は「篠原シュウレ」に強く引き付けて政治史研究を専ら「政治学の手法による歴史分析」として説明し、国内外の数多の非「理論的」研究を全く顧慮しなかった。また馬場は、「痛切な感情をかきたてる歴史ドラマ」から「いま在るもの」はいかにして生起したかを問う「地味な」方向」への「問題意識」の変化を現代の潮流と認定し、彼の周辺にも多くいたナシヨナリズム、ファシズム、帝国主義の研究者には一言も触れなかった。¹⁸⁾馬場の指導を受けた（部分的には高橋門下の）「ヨーロッパ政治史」専攻学生の大半は、政党システム論、ネオコーポラティズム論、政治発展論、連合政治論、市民運動論など、篠原が輸入した「比較政治」の分析枠組を共有しつつ、各国を素直に分担している。馬場「ヨーロッパ政治史」講義の紹介を見ると、篠原の「政治学的」手法を継承し「比較政治」へと再編しようとする意図は読み取れるが、篠原に対しどう独自性を出したのかが見えてこない（その点で執筆中の教科書『ヨーロッパ政治史概説』は注目される）。¹⁹⁾馬場は「篠原一先生との出会いの会」²⁰⁾（一九九五年一月一三日）、「篠原一先生新著合評会」²¹⁾（二〇〇七年九月一四日）と銘打った学者、言論人の大祝賀会を企画し、「篠原シュウレ」の繁栄のために八面六臂の働きをした。

同様に平島健司もドイツ政治史研究の防波堤とはならなかった。平島は篠原の指示で取り組んだ『ワイマール共和国の崩壊』で評価され、東大社会科学研究所に就職した。同書は岡や篠原の歴史像と、篠原、高橋の一次史料重視視線とを引き継いでいる。²²⁾だが平島は就職後、彼が本来希望していた現代政治研究に移行し、経済政策論やヨーロッパ

にとつて青天の霹靂であり、彼はドイツ・ナシヨナリズムの昂揚を批判的に追跡したが、三島憲一、石田勇治、大石紀一郎、木戸衛一、佐藤健生ら語学上手のドイツ研究者が「六八年世代」の観念世界を披露し、ヴァイツェッカー礼讃者の永井清彦が「過去の克服」に熱狂するなかで、高橋の分析はドイツ語世界への食い込みが浅かった¹³⁾。高橋のちドイツ統一過程を描いた単著書を発表するが、一般向け読物の体裁は取っており、学説整理も問題設定も結果考察も明確でない¹⁴⁾。戦後ドイツ史概説を書いた際には、「過去の克服」に関する枢要な補説を佐藤健生に「丸投げ」している¹⁵⁾。九〇年代以降の高橋は「世界内政政治」論のようなヨーロッパ左派言論にますます傾倒し、演習では現代ヨーロッパ知識人の政治認識が扱われた。反ナシヨナリズム、左派への感情移入という政治姿勢を、高橋は教育の場でも貫徹している。ある若手が博士論文で左派思想にもナシヨナリズムを助長する要因が伏在していたと主張したときには、口頭試問中にも拘らず逆上して威嚇的行為に及び、議長が身を挺して制止するという事態となった。

高橋進門下でのドイツ史研究が困難になるなか、馬場康雄はドイツ史研究への包容力を残していた。馬場はイタリア政治史を専攻し、主要業績であるジョリッティ論文三つは、篠原『ヨーロッパの政治』にも影響を与えた。一九七一年修士課程に進学した馬場は、やがて東大社会科学研究所助手となり、同助教教授を経て一九八五年に篠原の講座後継者となった¹⁶⁾。馬場の流麗な「ヨーロッパ政治史」講義は学部内外に多くの信奉者を生んだ。馬場の諸論文には中道左派志向が滲み出ているが、彼個人が政治活動をするのではなく、政治的には比較的柔軟な態度で学生に接した。また三十箇国語を学習したという馬場の博覧強記は有名で、非英語文献を読むのに困難がなかった。馬場（十平島）の演習では、高橋の演習では決して扱われない本格的なドイツ語の歴史書、例えばヴェーラー、ニッパードイのドイツ史概説が扱われ、平島ら日本のドイツ史家が一樣にヴェーラーに共感するなかで、無視され気味だったニッパードイにも理解を示した。

だがにも拘らず、馬場康雄が実証的なドイツ政治史研究の防波堤となるのには無理があった。馬場は学術単著書を刊行しないまま、個別研究から現代イタリア紹介に移行している。馬場は研究上篠原の手法を忠実に継承するのみな

論文の学問的意義や論旨が不明瞭となり、篠原の切れ味のある政治評論と比べて印象が薄い。またスペイン、イラン、韓国など多様な地域を扱っているため、「理論」の前提となる各地域政治の背景知識がなお初歩的であり、またヨーロッパ近世政治史などの認識も紋切型で、輸入「理論」をどの程度検証できているかにも疑問が残る¹⁰⁾。

高橋進は一九八四年一〇月から二年間ボンに滞在した。これは「外務省専門調査員」としての大使館勤務であった（在独中の一九八六年三月教授昇任¹¹⁾）。高橋が何故留学ではなく、こうした道を選んだのかは不明である。高橋の滞独記録は未公開で、吉野や篠原のような現地人観察はなく、後年学生にはボンでの日本人外交官、報道関係者との交歓の思い出を語っていた。決然たる西欧主義者だった高橋は、ブランドゆかりのバート・ゴデスベルクに居を構え、西欧に近いライン地方を愛したが、東部ドイツやロシアを含む東欧を忌避し、その地域の研究生には不快感を示すようになっていく。なお高橋がドイツ学界と対決した形跡は見つからない。篠原には私家版とはいえドイツ語のドイツ政治史論文があったが、高橋にそれに匹敵するものはなく、ボン大学にも彼の痕跡はない。高橋は対象国ドイツに微妙な態度を取り、地域研究としてのドイツ政治分析を追求する学生を「ゲルマニストのよう」と嫌い、彼自身が初期に推進したドイツ史の実証研究を、後年は寧ろ抑制する側に回っていった。高橋はドイツ語使用で苦勞することが多く、学生へのドイツ語推薦状の発給にも困難が伴った。東大法学部には法律系で優れたドイツ語通訳者が多く、ドイツから頻繁に法学者を招いていたが、高橋の国際交流はドイツではなく英仏、特に労働党系のシェフィールド大学日本研究所に集中していた。高橋の演習は当初から英語文献中心の国際政治学演習であり、綿密なドイツ語史料・文献講読は行われなかった。

帰国後の高橋進は専門的なドイツ政治史研究から離れていく。ドイツで社会民主党の外交政策に関する史料を収集した高橋だが、帰国後にそれを活用した研究を発表することはなかった（この史料は彼の研究を継承した門下生（のちの助手）網谷龍介に譲渡された¹²⁾）。高橋はデタントや緑の党を紹介するなど、ドイツ現代政治の解説者として活動したが、その文章は国内向けの時事評論に止まった。冷戦終焉と「ドイツ再統一」は、「ポストナショナル」な高橋

のシントレーゼマン評価を継承してロカルノ体制成立史を扱う本書は、ドイツの英仏への妥協と恭順を肯定し、独露連携を否定する西欧主義の国際政治観で貫かれていた。このためラパロ条約への言及は僅かで、しかも否定的な評価が目立つ。叙述手法で言うると、篠原から継承した政治過程中心の政治史叙述で、叙述から個々人の思想が排除され、歴史が無機質な「主体（アクター）」間のパワー・ゲームに還元されている。最後に高橋はナシヨナリズムを右派勢力の害悪として描こうとしており、社会民主党など左派勢力の国際協調志向を疑わず、共和国支持派のナシヨナリズムには立ち入らなかつた。

高橋進はヴァイマル外交研究に次いで歴史研究を二つ執筆している。それは篠原一主宰の「連合政治」研究の枠内での戦後エステルライヒ大連合政権の考察であつた。⁽⁶⁾この企画は、野党の大同団結で自民政権打倒を目指す篠原が、諸外国の先行事例に学ぼうとした戦略的共同研究であつた。次いで高橋は、戦後ドイツ社会民主党の統一重視から緊張緩和と統一拋棄への「転換」を論じた。高橋にとつて政権獲得へと繋がるこの「転換」はドイツ左派栄光の一頁であつた。この論文は、助手論文のような「理論」への拘りによる論旨の混乱を含まず、党内論争を追跡した非「理論的」歴史研究であり、結果考察も付されていた。⁽⁷⁾なお、西川正雄編『ドイツ史研究入門』⁽⁸⁾でエステルライヒ共和国や戦後ドイツを担当したのも、高橋の重要な業績であつた。

だが高橋進は就職直後から左派言論人をもつて自任し、坂本義和らと平和運動に加わつたので、折角本格的に着手したドイツ政治史研究に集中できなかつた。平和学者、「リベラリズム」国際政治評論家としての高橋は、日本の平和運動の理論武装に資する欧米の「理論」を輸入しようとした。その第一歩が横田（のち猪口）邦子と共同での、ゼングハース平和学構想の翻訳だつた。⁽⁹⁾高橋は神川が始めた「国際政治史」を、比較政治に依拠した内政優位の世界政治分析へと換骨奪胎していく。高橋は「権威主義」、「開発独裁」の概念を紹介し、更に「国家」、「権力政治」、「帝国主義」にも取り組んで、二〇〇八年に一冊の本にまとめた。最新「理論」の輸入から自前の「理論」構築の試みまで、五つの「理論」研究の性格は様々だが、構成力が十分でないためまま欧米の図式的研究のパッチワークと化し、

二〇一〇年)である。高橋は、父・清(一九二五年)が長大な歴史を誇る革新自治体・川崎市で助役から社会党、共産党、労働組合の支援で市長となり、妻が岩波書店、朝日新聞社で編集者を務めるなど、公私共に左派的ミリュールに身を置いていた。高橋は日本平和学会副会長、東大総合研究博物館館長、同大学院法学政治学研究所副研究科長・評議員、COE拠点リーダーなどを歴任して大学行政、学界運営、文部行政で発言力を有し、左派政党、左派言論界、労働組合、出版業界とのパイプを誇る文字通りのフィクサーであった。

高橋進は学部卒業直後の一九七二年四月に助手に採用され、一九七五年に助手論文「ドイツ賠償問題の史的展開(一九二〇年—一九二四年)——国際紛争及び連繫政治の視角から——」を提出して同年八月助教に昇任したが、この大著は『國家學會雜誌』で六回連載という異例の待遇を受け、やがて岩波書店から刊行された⁵⁾。この作品は、若き高橋の心意気を示すものである。まず庄巻なのは、公刊史料を徹底的に閲覧し、未公刊文書にも手を伸ばし、同時に発表された研究文献にも気を配って、当時の日本では有数の重厚な歴史研究に仕上げている点である。また「篠原シュレ」の高弟らしく、「アメリカ政治学」の理論を外交史叙述に活用したところも野心的である。短めの文章も躍動感に満ちており、激動の時代を描くのに適している。だが本書は、篠原助手論文とは違って問題意識が混乱しており、明確な結論を欠いていた。本書はヴァイマル外交史への興味から出発して賠償問題に逢着しているが、途中から次元の異なる「リンケージ・ポリティクス」理論が登場し、問題設定を混乱させている。史実の究明が目的なら、既成の分析枠組を天下一の導入することは、視野狭窄の原因となつて有益無害だろう。逆に「一般理論を鍛えるのが目的なら、一つの事例をここまで深めるより、ブリントンのように複数の事例を比較検討して、その最大公約数から「リンケージ・ポリティクス」理論を鍛え上げるべきだろう。そもそも本書が批判、克服したい先行研究が何なのかも、高橋は明示していない。なお曖昧な問題意識を反映して、本書は歴史叙述から結果考察なしに謝辞に突入しており、論文として尻切れトンボになっている。更に本書では、集積された事実が延々と連ねてあり、その意義付けが必ずしも十分ではないため、篠原やのちの馬場とは対照的に冗長で読みにくい印象がある。内容面でいうと、篠原

東京大学法学部のドイツ政治史研究

——批判的回顧と建設的提言(二)——

今野 元

(4)「理論的」政治史研究の「素直な戦士たち」——「篠原シュレー」第一世代

篠原一は一九七三年一〇月に悪性腫瘍で入院し、一年ほど休職を余儀なくされたが、そのときこう考えたという。「そのとき後悔したのですが、僕はそれまで自分のやってきた学問を伝える若い学者を育ててこなかった。それで、生のある間に若い学者を育てようと決意したんです。」^①実は篠原は、発病以前にも多くの「若い学者」を育てていた。ナチズム研究で知られ多くの若手ドイツ研究者を育成した山口定、フランス革命史研究で法学博士号を取得した井上すず、イギリス労働党研究で法学博士号を取得した犬童一男、ドイツ共産党研究で法学博士号を取得した山田徹がそれである。しかし生命の危機に瀕して篠原が慫したものは、「それまで自分のやってきた学問を伝える若い学者」だった。ここで姿を現すのが、「篠原シュレー」第一世代である。篠原の休業時に助手であった馬場康雄、高橋進は、一九七三年度の(非公式)学部演習で師範代を務め、^②やがて法学部教授となった。のちに馬場、高橋の後輩で東大に残った高橋直樹、平島健司がこの「篠原シュレー」第一世代に加わるが、東大を去った弟子である野地孝一、舩添要一、田口晃、若松隆らの名が、のちの「篠原シュレー」で話題になることはごく稀であった。

篠原一門下生で最初に東大法学部助教採用されたのが、ヨーロッパ外交史講座を継いだ高橋進(一九四九年—